

奈良絵本「ふんせう」（承前）・『伊勢物語』の註釈書（一）

— 國學院大學図書館蔵善本解題VI —

徳江元正

〔三〕

本学図書館にはもう一点の「文正の草子」がある。

〔ふんしやうのさうし〕

大本一冊（上欠）、寛永比刊、後補茶色布目表紙、四ツ目袋綴、題簽ナシ。縦凡二七・一糎 横凡一九・一糎、三十二丁、十
九丁表は白丁、内題「ふんしやうのさうし」、無匡郭半葉十一行、濁点を付けることも、漢字に訓みを付けることもある。和歌
はずつと下げて、一首二行の分かち書き、上の句は凡五字分下げ、下の句は六字分下げて書きはじめる。版心「ふんしやう」、
丁付「一（一廿一）」、三十二丁には付けられていない。挿絵は縦凡一八・七横凡一三・八の匡郭付き、（四オ・八ウ九オ・十四
オ・十八ウ・二十五ウ二十六オ・三十オ）、人物はやや大ぶりで、十八丁と二十五丁の間に、中将と文正の姫とが契りを交わす
大事な画面を欠いている。刊記などナシ、蔵書印ナシ。

「文正草子」の伝本は極めて多い。柳亭種彦が『用捨箱』で「昔は家々になくてかなはざりし冊子」と叙べているごとく、松

本隆信氏編「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』所収）の「文正草子」の項では凡八十本が分類整理されている。その（十）の（イ）群のいわば親本とも言うべきものが、この絵入大本とされている。これが「原の形に近いもの」と、古く阪谷俊作氏が「文正草紙の版本に就いて」（『書物の趣味』三、昭三）で叙べておられる。

この絵入製版本の挿絵は、諸本を扱ってゆくと、いろいろと問題を提示するのではあるまいか。

阪谷氏は、この十一行本の製版本を幾つか調べられた上で、寛永十二年刊の『舞の本』と版式及び挿絵の様式が「酷似」していることを指摘し、下巻「十九張の表と三十二張の裏が余白になつて居る」と記しておられる。見開き二面の絵が一面に縮小されるのは、珍しいことではない。

ところが、先に示した『室町時代物語大成』十一の翻刻を見ると、十九丁表は白丁ではなく、画となっているからには、見開きの二面大の挿絵を有する本もあったのであろう。この寛永比絵入製版本は、諸所に十本ほど存するが、私は精査したことがないので、存疑としておくほかない。

氣にかかる言葉を二・三挙げるならば、「見透しの尉」とあるべきところを「見とをしの上手」としており、この「翁」は詠歌に続けて「きよかつ」と名を記している。商人が荷を入れる運搬具は「千駄櫃」とすべきであろうが、本書では「せんたはこ」とする。あと「きぬてのこひ（絹手拭）」というのが見えている。『日葡辞書』に「テノゴイ」とある。室町初期、いかさまの陰陽師に異名をミトヲシというものがいたと『看聞日記』や『建内記』に出ているが、「文正草子」の作者・筆者はそれを承知していただろうか。

『伊勢物語』の註釈書(一)

本学図書館には、『伊勢物語』にかかわる一群の貴重書がある。それらの多くは、春秋二季の國文學會の特別展示で順次公開されており、斯道に造詣の深い方々でご存じのむきもおられよう。特に識者の関心を惹いたものに、中古文学会の折に出陳した武田祐吉博士旧蔵の絵巻(紅梅文庫旧蔵本、二軸)がある。なぜか室町期末から江戸初期にかけての絵巻は、早くから海外に流出してしまっている。絵巻の全容を影印に付すことは、目下のところ不可能なので、今回は数点の註釈書を採用あげて簡潔な解題を添え、それらの内容を具体的に引きながら、あらあら説きまらしうと思う。

一 「伊勢物語註」写本(零本)一冊、小汀家旧蔵本。

濃茶渋紙表紙、縦凡二二、〇糎×横凡十五、六糎、四ツ目袋綴 本分七十丁、前にアソビ一葉、内題ナシ。半葉九行書き、後補と考えられる表紙にも書名は書かれていない。表紙の裏に「伊勢物語根本浅■」と書いて墨を引いて消した痕があるが、これが書名であるか否かは不明。今、仮に「伊勢物語註」とする。室町時代の中比の写と目せられる。もとは二冊本か三冊本であつたろう。若し二冊本であつたなら、下冊の方は上冊よりもやや厚めであつたろうと推測される。

一丁の表から二丁の裏にかけて、題号の由来が書き記され、三丁表から「初段」がはじまり本分最終丁六十九丁の表で「四十八段」が終り、同丁裏の下部に、「伊勢」、「本居春庵」と本文と別筆にて二行に記す。「本居春庵」はいかなる人物か不明であるが、「伊勢」は国の名であらう。所有者の自署であらうか。左下部に「をばま」の朱印。また、七十丁裏に、本文と同筆にて「右伊勢物語ハ世間ニ比類ノ多ク有といへとも今見る所の一冊は□細綱のことく書写置ノ世の重寶とならむかし」とやや乱雑な走り書きで記されており、裏表紙の裏に「越後之国」と墨書、続けて村の名が書かれているようであるが、墨でぬりつぶされていて分明ではない。

註の施し方は、まず定家本系の本文を引き、頭部に朱の合点を付し、多くの章段には、その右肩に段の数を書き添えてある。和歌は、二行の分かち書きで、上の句は本文より凡三字分下げ、下の句は凡五字分ほど下げて書きはじめる。集付けを伴うもの

が多い。朱の合点は、和歌の頭部や註として採りあげた語句に付け、国名など固有名詞には朱引が施してある。和歌の引用には、^へ点を付けることもあり、漢字にはままた訓み仮名を付すところもある。

まず、四面三十行に互る『伊勢物語』の題号の由来を叙べる条を、引用してみよう（朱印・朱引は省略に従う）。

抑比双紙の名を伊勢物語といふ事いせといふ女の

作たれば也 そのなにかせていへり 又一せつにハ此国の

そうみやうをいせといふかしかればいんやうをとつてなんによ

のあわひの事をいひあらわす也 いんやうの二ぢすな

わちいせの二ぢといへり しかる間国の名にまかせて

いせものかたりといへり 又一せつにハ此物かたりおわり

たるおりふしいづくともなくゆるしいろのひたゝれに

かけおびかけたる女房きたりてさてありがたし 此物

かたりに入べき哥一首おちたりといふ いづれの哥と」（一オ）

とへば 千はやふるいせのはまおきおりしきて

たひねやすらんあきまはまべに

此哥といふ さていづくよりの人かたとへばいせよりの

御つかひとこたへてかきけすやうにうせたまふ さ

てハ天照太神もしろしめされけりとて伊勢物か

たりとかうす 又さひばらに云 天照太神の御ことば

に男女ともにむまるゝ事まるが力にあらずや さ

れども女子むまるゝ事きみこれをもちゆるこ

となかれ 国をほろぼすなたちなり かならず十」(二ウ)

のしつあらんや なんしむまるゝ事きみこれをす

つる事なかれ かならずまじゆをまきはくどゝあらん

や このさたおくの二ツハさうなくあらわすべからず

まへのはくるしからず されバ此国をいせといふせうかあ

りへ伊勢にいていせをばいかてへたつべきしるもしら

ぬもいせのいせにて これをもつてしるべし 伊勢の

二ぢ伊ハいんによ也 勢ハやうなん也 又一せつなりひら

げんぶく廿一日也 げんぶく八人となるはじめなり

若き事を古き事になしたうだいの事になさじ」(二オ)

廿一日といふぢをあわせてむかしといふぢ也 とかくに

つくり物かたりなればむかしおとこと伊勢が

かきたてたる物なりと云々」(二ウ)

まず、伊勢が作者であることを叙べる。この一条は、以下引用する初段の註でも言及しており、「真実の義」として伊勢が業平一期のことを七条の後に語り、それを記したものであるという。次に、「伊勢」は陰陽の義で即男女のことをあらわすと叙べる。次は、やや説話的なもので、この物語を語り了えた時、いずくともなく女房一人現われ、入るべき歌が一首欠けているときとして、

千早振る伊勢の浜荻折り敷きて 旅寝やすらんあらき浜辺に

を示した、いづくよりの人と問うたところ「伊勢よりの御使ひ」と答えてかき消すごとくに失せたという。その次は、催馬楽に見える天照大神の御言葉と、日本をいせという證歌とを引いて、謂われを説く。

伊勢にいて伊勢をばいかで隔つべき しるもしらぬも伊勢の伊勢にて

次に、「伊勢」の二文字は、「伊」は「陰女」、「勢」は「陽男」をあらわすという説。次に、「若き事を古き事になし、当代の事になさじ」とあって、おそらくは「前後不同」・「次第不同」を意味するものであると思う。次に、在原業平が元服したのは廿一日で、この三文字を合わせると「昔」となり、この物語は伊勢述作の「作り物語」であり、故に「昔、をとこ——」と書き添えているのだと説く。

『伊勢物語』の註釈類を多少なりとも手がけられた向きには、どれもこれも目にも耳にも親しい説々である。試みに、『伊勢物語知頭抄』（統群書類従本）と較べて、二、三の問題点を示してみよう。まず、在原業平と伊勢と七条后との関わり——。

鎌倉期の成立になり、冷泉家の所説を伝えるという、この代表的な『伊勢物語』の註釈書によると、業平は元慶元年十月の比から大和守継蔭の女、伊勢を妻と定めたとある。男五十二歳、女二十五歳。この間に、伊勢は業平が自ら書きおいたものを清書した。元慶四年二月、業平は老少不定の世の習ひを思い、死後に、後の人が書いた態で世に披露するよう伊勢に言い遺し、翌年没した。伊勢は、自身のことを書き留めてある箇所は憚りもあろうかと省き、それに少し似た物語を書き替え書き替えた。業平が死んだ七年後の、芹河行幸の部分や、そのみならず時代が下った物語は、みなこの時に書かれたものである。伊勢が七条の後の許を退いて、そのかみ業平が書き留めておいたものを改めて調べてみると、「古き反古」の底に「伊勢物語」と書かれている本があった。これが今の「初冠の本」である。先に伊勢が書いたものは中書なかがきといって、世にあまり用いられぬものであり、「狩の使の本」と呼ばれる、と叙べる。次に、「伊勢」を天照大神とする説に言及する。

業平が狩の使いとして伊勢国に下り、天照大神の御前で我が身のふるまいを書き留めて末世に伝えようと思ひ染めて書いたのであるから『伊勢物語』と名づける。『伊勢物語知頭抄』には、題号の「義の悉く」が載せられているかに見えるが、へ伊勢にいでて——」の一条は引かれていない。またへ千早振る——」の神詠譚は、へ神風や——」の形で引くものもあり、身近かにある影印本の『伊勢物語難儀抄』上（天理図書館善本叢書58『和歌物語古註續集』所収）でもほぼ同趣の説話を引き、へ神かせや——」と並べて、

へおもふこといはてた、にややみなまし 我とひとしき人しなけれは

を掲げる。前者は改めて言うまでもなく『万葉集』卷三、五〇〇番の歌で、影印本の『仙覚抄』（仁和寺蔵『萬葉集註釈』、京都大学国語国文資料叢書・別巻二）には、

ハマオキトハ葦ヲ伊勢ニハハマオキト云也 撰津国ニハアシトイヒアツマニハヨシトイフナトイヘリ

と見えている。後者の和歌は『伊勢物語』の「普通の本」の第二百二十四段に出ている（註1）。

『伊勢物語知願抄』では、これらの説々はいずれも真実の義ではないから信ずるにたりぬとして、実は「伊勢や日向」という義によって『伊勢物語』と称するのであると、やや長い「伊勢や日向の物語」の因縁へと展開させてゆく。この物語は「普通の物語」ではないとして

——その故は、我が身のことを古き世のことに言ひなし、昔のことをば我が身のこと書きなし、京のことを田舎のことに書きなし、田舎のことをば京のことに書きなし、始めにあるべき事をば終りに言ひなし、終りにあるべきことをば始めに書きななどして、前後不同に正しからず書きたるによりて、伊勢や日向といふ義につきて、伊勢物語とは名づけたり。

本書の「若き事を古き事になし——」の一節は、やや舌足らずの表現であるが、右の『伊勢物語知願抄』に照らし合わせてみると、真意は汲みとれよう。「伊勢や日向の物語」——「まことにあることの次第不同にして定かならず左さまなること」という諸註釈に見えるものは、推古天皇の御宇、日向国の佐伯恒元さいきのつねもとと伊勢国の文屋善算ふんやのよしかずとの魂と骸とをとり違えた奇怪なる説話で（註2）、後に諺のように用いられたことは謡曲「歌占」に見えており、諺の集大成『譬盡』たとへづかし（龍谷大学蔵、孤本、天明七年写）にも引かれてはいるが、このやや長い説話は、「佐伯恒元」なる人名同様、『伊勢物語』の註釈類を扱う上での極めて重要なものと言つてよからう。

次に、本文の「初段」全文と「二十三段」の註の部分とを引用してみる（本書冒頭部三分分。同じく、異体の漢字は通行の文字にてあらわす。改行・改丁の印は施さない。また、文の切れ目は、一字分空けた）。

・初段
むかしおとこころみかうふりしてならの京春日の里に

一此物かたりをいせとかうするの心こちうのせつまゝありといへり た、しんぢつのぎはいせといふ女なりひらいちこのことを七でうのきさ記へかたりたてまつるをしるせりと也 此うちに中将のしるしおかれたるもまじれり しよせんつくり物語と見はんべるへき也 この義定家卿義なり

一むかしとをけるハつくり物かたりなればなり こぞはことしのむかしきのふはけふのむかしといふ事あるにや 又中将よからぬしよぎやうなどかきしるせることもあればそれをば、かりてたうだいの事になさぬよしをいひたてんためにむかしとをけるよしなりとや

一うるかうふりとハげんぶくのこと也 げんぶくハ人となるはじめなればしよだんにかけり げんぶくしてやかてかりしたるにハあらず なん時にてもうるかうふりの、ちならの京へたかがりしたるよし也 又ならの京とハまへにハやまとの国なかにだいをたてり いまのみやこへいあんじやうよりのこと也 しるよししてとハなりひらのちきやうなりといへり なりひらへいぜいてんわうの御まごなればやまとのうちにりやうちのあるべき事もちろん也 一へなまめいたるとハ女をほめたることば也 一へはらからとハきやうだいの事也 此きやうだいの女たれともなし こちうにハをのゝ名をいひたつるにや たうりやうにもちいざる也 一へかいまみてとハかきのあいたなとよりみたるなり 一へはしたなくてとハかゝるふるさとにけつこうなるこの人のあるべきとおほへぬなり おもひのほかの心なり たとへばよわき物につよくあたることをはしたなくてといへるがごとし 一へかりぎねのすそをきりてとハかりばの事なればなり 又おもひのせつなるをしらせんためにすそをきりてとかきたるにや 一へむかしがの明神かしまの明神にわかれたまふときかりぎぬに哥をかきておくりたまふ なりひらもこれをおもひいで、かりぎぬのすそをきりて哥をかきおくられたまふなり むかしハたがりのしやうぞくにハすりかりきぬをもちいたるにや 一へかすが野、わかむらさきとよみたるハ此所かすが野なれば也 又むらさきに女をたとへていへば也 しのぶのみたれとハあふしうしのぶの里にもじのあらわれたるいしあり 此もじいしにてみればあさやか也 物にすりつくればみだれてもじみえぬといへり たゞおもひのみたれたるをいわんため也 一へをいつぎてとハ人におつつきなどしたるにあらず 女のゆくゑをしたい たつねてつかわすよし也 一へみちのくのしのぶもじずり 此哥ハとをるのおとゝの哥也 此返しににあひたる哥なりとおもふ

よし也 とをるのおとゞの心はわがおもひのみだる、ハそなたゆへにてこそはんべれといふ心をたれゆへとおさへていへる也 かやうにみたれておもふをきよくのふつれなくおはしますよとらミたる哥也 有引歌へみちのくのしのぶもじずりなかりせばおもひの心をたれかしらまし 哥の心ばへとハかのおとゞの心をもちひかへたるよし也 此心ハしのふのみだれかきりなくとよミたまふハわれゆへのみだれにてハあらじ たれゆへのことにとわが身にうけぬ心にいひなせるにや 一へいちはやきハさうそつ也 早卒 かやうにかけける也 一ミやびハなさけ也 このねうばうをいせかほめてかけけることはなりといへり(初段)

一へる中わたらひ 田舎にかよひすむ事也 奈良の京などにや 大りのほかハ大かたる中といふにや 一へ人の子ども 男ハなりひら女ハありつねむすめ也 一へつゝゐつの 此歌かさねことば也 あつさ弓まゆミみよし野、よしのなど、いふがことし 一へまろがたけ たがひに身のたけをいかほどにならん時ちきりをかわすべきなど、いへるなるべし としハいくつにても也 一へくらべこし かミあぐとハおとなになればかならずする事也 おとこのけんふくの心也 心ハたゝきミかてをふれんのよし也 一へ女おやなくとハこちにハ時をうしなひてなきがことくになりたるといへり たうりうにハマことになくなりもせよ又なきがことくにもなるべし 一へもろともにいひかひなくてとハ男女ともにかやうにたつぎなくてありへんもいかゞをのゝいかさまにもしかるべきかたへたよりをもとりてなんといふなるべし やまと物かたりなにもかくこそ あしからしよかれとてこそわかれけめなかなにわのうらハすミうき かくよめる心も此心也 此だんの心もなりひらの心にあきたまふにハあらず 女をれんミんの心なるべし 一へけさうじとハ身をつくろひなとして也 古今のことがきにハ琴かきならしてとあり 一へ風ふけばしらなミハぬす人の事といひならわせり しかハあれどもたゞたつといわんとておきつしらなミといわんとて風ふけばといへり これみなじよのこと葉也 此哥にて此女の心あはれふかきにや よく思つてみて待るべしと也 つらゆき此哥ハうたのほんなりといへりとかや めつゝの引哥に定家つゝゐつの井つゝのたるひとけぬまにほとなく年の越にける哉 又云斗なきちいろのそのみるふきの生ひ行すゑハ我のミそみん 又風吹はの引哥にへわたつ海のおきつしらなミ立田山いつかこえなんきミかあたりに 一へてづからいひがひとりて いゝもるへくとやらんをいふ事にや これらはいかひの事なるに

や 一きミかあたり まんようの哥とや 伊駒山 やまとかうちのあわひにある山也 やまと人ハなりひらの事をいへり 此だ
んにありつねかむすめと名をあらハすハていじよのめいよを世にしらせんため也 きミならてあしかりけりと思ふにハいと、難
波の浦そ住うきと也 (第二十三段)

「初段」冒頭部には、題号の一件がまだ続いている。業平と伊勢とが、この物語にいかに関わっているのか、その一部は、『伊勢物語知頭抄』に見るがごとくであるが、この「昔男」を「在原の中将業平」としながら、「なよめいたるをんなはらから」が誰であるかに関しては言及せず、「かきまみ」のかき^なを垣とせず「もののひま」と解釈し、「いちはやし」を「切なり」と採らず「草卒」、「みやび」を「ふるまひ」とせず「情」^なと解くなど、明らかな相違も見られる。「みやび」に「嫁」を宛て、「まぐはひ」「なさけをかはす心」などとする註釈書もある（註3）。さらに興深いことに、業平の「いちはやきみやび」というふるまひは、春日の明神と鹿島の明神との故事を思い出してそれに倣ったものと叙べる。故事や説話を採り入れることに心を用いた、冷泉家流の註釈にも見えない珍しい話柄である。

「二十三段」でも、これは「古き物語」であつて業平のことを叙べているのではないと、冒頭で断わっている。但し、終り近くの行文では、「やまと人」を業平とし、「有常の娘」を「貞女の名誉」として、世に知らせるべく書き記したと叙べる（註4）。『万葉集』より「なおもあなたのこと」とあるのは、「つつるつの——」の類歌のことを指しているであろう。「つつるつの」とあるからには、本書が定家本系の本文を引いていることが、明らかである。この章段で「古流」と「当流」と両様の所説を引いているのは注目してよい。『大和物語』に言及し、その和歌を二首まで引くのは、おそらく、冷泉家流とは別の言説であること示すものであろう。『伊勢物語註』（室町文學纂集I・昭62）も、この二十三段の註では、やや詳しくこの芦荻説話を引き、

へあしからしよとしてこそは別れつれ 何か難波のうらハ住うき

へ君まさてあしかりなんと思ふより いと、なにはの浦ハすミうき

と、本書とは小異のある二首を載せる（註5）。

次に、第二段以下の引歌・證歌また説々の類を引いて、本書の特徴に触れてみよう。

二段

引哥にいづみしきぶへつれくとふるはなミたの雨なるを春の物とや人の見るらん へふしておもひおきてなかむる
春雨は花の下ひもいかにとくらん 又万の哥にへいく山の木、のくれなひそめつらんそほふるしくれおやむときなし
此三首よく／＼ぎんミあるべし 有哥に 何せんに玉のうてなも八重むくらはへらんやとにふたりこそねめ 又云へ
たましける家も何せん八重むくら生ひたる小屋にいもとしますまは

四段

こちうのせつに 又引哥にへなかむれは月やハありし月ならぬうきみひとつはもとの身にして

六段

有哥に ちりぬれはのちハあくたになる花をはかなくてふのなかれゆくかな 引哥へあさなく／＼草のうへにしをく露
のきえはともにとおもふわれしも

七段

一へ京にありわひてとハ中将百さいの時の事也 とうごくへくだりのこゝろ也 こちらにしゆじゆたとへなとをいひ
たつる也 もちいべからず 此をくがきに詞花言葉もてあそぶべき物也と定家卿かける也 ことばのはなことばのは
といふよし也 此ことばかんよう也

九段

孝徳天王の御子にありまの王子の哥に いへにてハけにもるいゝをくさまくら旅にしあれはしるのはにもる こちう
にハきりかミの哥とてさま／＼のせつあるにや さもこそ候め たうりうハたゝかきつばたを句のかミにたち入てた
びのはるかなるさまをよめる也 一へしほじりの事 俊成定家ふんミやうならずといへりとかや 有哥にいにしへの
秋の空まですミ田川月に事問ふ袖のうへ哉

十一段

同引哥ニへわするなやとるたもとハかハるともかたミにしける夜半の月影 すこしいひかへたり

十二段

引哥にへ武蔵野ゝかすむもしらす降雪にまた若草のつまそこもれる 又男をつまといふ證歌へとをつ人まつらさよ姫
つまこひにひれふりしよりをへる山の名

十四段

万なか／＼に 万の哥にへ中／＼に人とならすハこにもならまし物を玉のを斗 ある哥にをくろさきミつのこし

まの人ならばミヤこのつとにいさといはましとある哥をつくりかへたる也 万之哥にへいま来んとせなハかへらすあ
けな又ひさしきほとに待もこそすれ

十五段 引哥へおもふてふ人の心のくまことにたちかくれつゝみるよしもかな

十六段 引哥にへ秋やきて露やまかふとすぐか山ふれるもみちのそてにうつろふとあり さてくことがきながし

十七段 有哥にへ桜ちる木の下風はさむからて空にしらぬ雪そ降ける

十八段 こちうにハ小野、小町といへり 中将のとなりでありとみえたり 引哥にへ花見つゝ、人待時ハ白妙の袖かとのみそあ
やまたれける

十九段 有引哥にへ天雪のかへりし風の音せぬはおもわれじとのこゝろなりけり

二十一段 有哥にへ人はいさおもひやむとも玉かつらかけにみへつゝ、わすられぬかも 有引哥へわすれけりわすれんとおもふ心
あらはわすれましとのわすれはてつゝ、 さて古今の哥にわすれなんとおもふ心のつくからにありしよりけにまつそ恋
しき

廿二段 有哥にへ簪鷹^{はしたか}のとかへる山の椎柴^{しあしば}のもみちせんはやきミをわすれん

廿四段 家隆哥にへと、めかね岩に書けることの葉を色にみするハなみたなりけり

廿七段 有哥にへあさてあらふたらひの水に影みれハ恋に我か身ハおひやせにけり

卅一段 有哥にへわすれ川つらさハいかにいのちあらはよしや草葉よならんさかミン

卅三段 万の哥にへ蘆^{あしべ}辺よりミちくるしほのいやましにおもふかきみかわすれかねつる 此哥をひきかへたる也

卅六段 万の哥にへ谷せはミみねに生ひたる玉かつらたえんこゝろをわれおもハなくに

卅七段 花の下ひもといふ事もあり

四十五段 引哥にへ天飛や雁のたよりにいつしかも奈良の都へことつてやらん

『伊勢物語当流抄』の一本(青谿文庫蔵本)に、上冊を四十八段までとするものがあるが、偶然の一致であろう(大津有一氏『増訂版伊勢物語古註釈の研究』、昭61)。

二 伊勢物語頭書 写本一冊

縦凡二五・五×横凡一六・〇 後補薄茶表紙、四ツ目袋綴、題簽(凡一五・九×三・一) 金砂子散ラシ、中央上部に貼り、「伊勢物語 全」と墨書(原題簽、本文と同筆)、本文墨付四十九丁。内題ナシ、半葉九行書き、但し十行に互ることまあり。最初の三面に、『伊勢物語』の題号に付き記し、第二丁の裏から註釈に入る。註は四十八丁の裏で終り、次のごとき識語が最終丁の表に八行に互り記されている。

此物語伝授あるおきなその事くを全一部に頭書きし
て置ける草紙をその子たる人に乞求め侍る 一向に秘す
るとにハあらねと廣くせん事も本意なし 又全部を写し
終んもいとまあらず 依之其やうある所くのミ抜て書
と、めかしらに段の数をしるしたり 全き双紙に引あわ

せて不審を解へきなり 于時正徳初のとし仲夏筆を名草
の濱に抛物ならし

印

〇ハ本文也
△ハかしら書也

○と△とは朱書。この一文によると、『伊勢物語』の伝授に関わりを持つ「翁」の手で「頭書」を付した「草紙」があつて、それをその子から某が借用し、本文全部ではなく抜書のかたちで書きおいたものが、本書である。書写の年次は、「正徳初のとし」とあり、本文第百二十五段の条に、業平が没した元慶四年から「文禄五年迄七百十六年歟」とあり、次の行に朱書で「正徳元年マテハ八百三十一年カ」とある。さる「翁」が「頭書」を付したのが、文禄五年であつたとれようか。某が整理して抜書をこ

しらえたのが、正徳元年とみてよからう。本書は、表紙と同じ楮紙の袋に収められている。打ちつけに、中央に「伊勢物語頭書」と本文同筆にて書き記されている。一寸ほどのコヨリがその上部に取りつけられている。冊子本では珍しい例と言えよう。次に、『伊勢物語』の題号に言及する冒頭三丁分二十五行を記す。

へ此物語を伊勢といへる事古注の儀にハ男女の物語といへり そのゆへは伊勢の二字男女とよむによれり 其外に種々の儀をたつ 当流にもちいさる也

へ伊勢物語といへるか業平狩の使に伊勢に下りし時斎宮に逢奉りし事此物語のかんしん也 これによつて此名ありといふ事あり 是をしんずるともがら結句狩の使の事を始にける本有 定家皆是をやぶる 又当流にもちいさる所也 惣して此物かたりの作者古人の説おなしからざる也 あるひは業平みつからしるすといひあるひは伊勢といふ女のかけるよし見へたり よつて定家卿（二オ）もけつしかたきよし奥書これをたつ しかハあれとかの筆作にハあらず なんぞ伊勢を講ぜんやと侍れば定家卿の心も伊勢が筆作を以此物語の題号とさだめらる、よし見へたり されは当流の儀是也

註の施しかたには二通りある。一ツはまず章段数を細字で記し、合点を付し、本文の最初の文を数行書いてから、○印（朱）

へ伊勢か筆作におるてもある説に宇多のみかどへ奉るよしをいへり 当流にもちいさる也 当流にたつる前ハ伊勢といふ女七条の後の宮へ業平一期の事を語奉る事をしるせりと 定て此内に業平自記の詞もまじハれり 所詮たゞ作物語もしるべき也 されバ源氏物語のやうには何もあらず 業平一期の事をかけるうちに少々ふる哥」（一ウ）

なとを取よせてかける所ハみな作物語の作法也 一条の禪閣の御注にもつくり物語のよし見えたり 作者ハ伊勢かかけるよし心得へき也 よつて此題号うたかひなきもの也 へ伊勢 伊勢守藤原継蔭かむすめ七条の院の女房後寛平法皇の御息所

へ伊勢ハ宇多のみかとの捨給ひしより一期しゆつくわいの義ある也 後ハかつらの里にすむ也」（二オ）

のもとに本文中から語句を引いて註を施し、また△印(朱)のもとに註を施す行き方と、もう一ツは、やはり細字にて「第、
段の内」とのみ書きはじめ、本文の冒頭部は引用せずに、以下、○印・△印のもとに註を施す行き方とである。

「頭書」の○印の部分は、凡五・六字分下げて書きはじめ、△印の部分は更に一字分下げて書きはじめる。漢字には、傍註を
付す例が少なく、朱線を右下また左下に引いてそれを示す。初段及び第二段・第二十三段の註の部分引用してみる。

一 へむかしおとこうるかうふりして奈良の京春日の里にし
るよしにて

△平城天皇も奈良の京に御座有し也 平城の御子阿保親
王又クマ保親王の子也 奈良の京にてそだちしゆへ旧記也
母ハ桓武天皇の御子伊豆内親王也 ○なまめいたる ○
かくいちはやきみやびをなん(初段) へ註5

二 △桓武天皇延暦三年十一月に山城乙訓ヲトクニの郡長岡に都をひ
られてうつさる、同十三年に平安城にうつさる、也

○その女よの人にはまさりけり(朱ノ○印から更に右下
に朱の線を引き、細字にて次のごとく傍註。後宇多院御
いみな世仁ニトと申により、^(朱点)の、字を入れてよの人とよむなり)
○やよひの朔日雨そほふるにやりける(「そ」から右下に
朱の線を引き細字にて註。壮雨又緑雨)(二段)

廿三

へむかし田舎わたらひしける人の

△時々田舎へくたるを云・但馬・讃岐などの任に有常下
る事を云へし

○つゝ、ゐつの井つゝ、にかけしまろかたけ過にけらし
ないもみさるまに△定家・つゝ、ゐつの井筒のたるひとけぬま
に早くもくる、冬の空かな 土御門内府・つゝ、井つの井
つゝ、のうへに水越てむすふも浅し五月雨のころ

○くらへこしふりわけかミも肩過ぬ君ならすして誰かあ
くへき

△髪をあくるかんさしする也 男の元服同前也

○さて年比ふる程に女おやなくなつたよりなくなるまゝ、にも
ろともにいふかひなくてあらんやハとて

△諸共によき方へゆかんと也 大和物語に・あしからし
よからんとてそわかれけめ何か難波の浦ハ住うき・おな
し心也

○古今かせふけは沖津白浪龍田山夜半にや君かひとりこ

ゆらん

△緑林白波序歌也 万葉に・わたつ海のおきつ白浪竜田
山いつか越つ、妹かあたり見ん 定家の云・敷寫の大和
にハあらぬからころもへすしてあふよしもかな・
此たくひ也と也

次に、章段の冒頭部数行を引用しない例を、二ツ挙げてみよう。

第七十一段の内

○千早振神のいかきもこえぬへし大宮人のみまくほしさに

△捨遣人丸の哥・千早振神のいかきも越ぬへし今ハ我身
のおしけくもなし 下句かへたり 作事也

○恋しくハきてもみよかしちハやふる神のいさむる道な
らなくに

△上の句子細なし 天の浮橋にて陰神陽神めかみおかみとなりしうへ
ハ神の制する道にあらすと也

次に、和歌の引用について記す。

万葉に・玉しける家しなにせん八重葎ハへたる宿も妹と
しすまば (第三段)

○手つからいるかひとりてけこの〈註6〉

○君こんといひし夜ことに過ぬれハ頼まぬもの、恋つ、
そぬる

△古今にハ恋つ、そふると有 (廿三段)

第百廿四段の内

○つるに行みちとハかねて聞しかときのふけふとハおも
はさりしを

△大和物語にハ中将此哥をよみて扱果にけると書り 此
物語に業平始終をあくるゆへに元服の朝より獲麟の夕ま
てにして書と、め侍り 業平元慶四年五月廿八日に卒ス
五十六歳 三代実録に見へたり 元慶四年より文禄五年
迄七百十六年歟

(朱) 正徳元年マテ八百三十一年カ

同・なにせんに玉の臺も八重葎ハへらん宿に二人こそね
め (第三段)

新古今に雅経卿の哥 葎の宿に思ひのなきにして・せめてやハおもひありともいか、せん葎のやとの秋の夕暮(第三段)

新千載に・おもひあれハ涙に袖ハくちにけり葎の宿に何をしかまし(第三段)

△後撰第五に・打渡しななきこゝろハ八橋のくもてに思ふ事ハ絶せし(第九段)

孝徳天皇の御子有馬王子の哥・家にあれハけにもるいひを草まくら旅にしあれハ椎の葉にもる(第九段)

△古今にハ春日野と有て眺望の哥と云 此物語の誹諧也(十二段)

△万葉に・中／＼に人とあらずハ桑子にそならまし物を玉の緒はかり(第十四段)

・しねる命いきもやすると心ミに玉の緒はかりハむといはなん(第十四段)

・たらちねの親のかうこのまゆこもりいふせくもあるか妹にあハすて(第十四段)

万葉に・里中に鳴なるかけのよひたて、いたくハなかぬかたれつまかも(第十四段)

△をくろさきみつの小嶋の人ならハ都のつとにいきとい

はましを(第十四段)

△古今に・思ふてふ人のこゝろのくまことに立かくれつ、見るへき物を

・折て見はおちそしぬへき秋萩の枝もたハ、にをけるしら露

△古今友則・花見つゝ人まつ時ハ白妙の袖かとのミそあやまたれける(十八段)

・又や見ん又や見さらん白露の玉をきしける秋萩の花・家隆の哥定家難せられたり(第廿一段)

△定家・忘るなよ三年の後の新枕さたむはかりの月日なりとも(廿四段)

△古今第十二恋の哥に春道列樹・梓弓ひけハ本末わかかたによるこそまされ恋のこゝろハ(廿四段)

又哥に・あしかれと人をハいはし難波かたわか身のとかのかへるしら浪(卅一段)

・あしへよりみちくるしほのいやましに思ふか君か忘れかねつるとあるを少下の句かへたり(第三十三段)

谷せはミ嶺に生たる玉かつら絶んの心我ハ思ハす 此歌を少かへたり(第三十六段)

△・朝かほのきのふの色ハ残るとも人の心をいかゝたの

まん(三十七段)

△紫の一もとゆへに武蔵野の草ハ見なから哀とそみる・

此哥を本哥にしてよめるよと記者の訳したること葉也(第

四十一段)

△よし野川よしや人こそつらからめ早くいひてし事ハ忘
れしのこゝろ(五十五段)

△捨遺に陸奥名取の郡黒塚といふ所に重之か妹あまた有
とき、つけて云つかわしける平兼盛・陸奥のあたちか原
の黒塚におにこもれりといふはまことか(五十八段)

△風流嶋^{フウリュウシマ} 肥後の名所也 後撰十五朝綱朝臣・真なれと
あた名ハ立ぬたハれ嶋よる白浪をぬれ衣にして 同十九
無作者・名にしおハ、あたにそ思ふ風流嶋浪のぬれ衣幾
世きつらん(六十一段)

△定家不逢恋・行めくりあふ瀬もしらぬみそき川かなし
き事ハ数まさりつゝ・恋せしとせし御祓こそうけすとも
あふ瀬ハゆるせ加茂のみつかき(六十五段)

△後撰第七二有けさをけふと書り 表ハ眺望の哥也(六
十六段)

△定家・今日そみる春の海辺の名成けり住吉の里住よし
の濱(六十八段)

△白菊の匂へる秋も忘れ草おふてふきしの春の浦かせ(六
十八段)

△瀬をはやミ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあハんと
そ思ふ(六十八段)

又・三ヶ月のおほろけならぬ恋しさにわれてそ出る雲の
うへより(六十九段)

△哀とも心のやミのゆかりとも見し夜の夢をたれかさた
めん(六十九段)

△小野の篁配所におもむく時・和田の原八十嶋かけて漕
出ぬと——(七十段)

又若菜の哥に・春日野の飛火の野寺出て見よ——(七
十段)

△捨遺人丸の歌・千早振神のいかきも越ぬへし今ハ我身
のおしけくもなし 下句かへたり 作事也(七十段)

△大淀の月に恨てかへるなミ松はつらくもあらしふく夜
に(七十二段)

△此哥も万葉にハかわれり 例の作物も(第七十三段)

△万葉にあハぬ日あまた恋わたるかもと有 下の句少替
へたり 伊勢作物語也(第七十四段)

△大淀の浦にかりほすみるめたに霞にたへてかへるかり

かね (七十五段)

・うた、ねに草引むすふ事もおしはかなの松の夢のまくらや (八十三段)

・定家の哥に・夢かとも里の名のミや残る覽雪そ跡なき小野のかよひち

△万葉に・志賀の浦のめかりしほやきいとまなミくしけのをくし取もみなくに国郡在所以下相違也 心同し (第八十七段)

△衣笠内大臣・芦のやのいさこの山のそのかミにのほりてみれハ布引の瀧 (第八十七段) へ註7

△見恋と云題にて為家・よしやた、芦のさとの夏の日に浮てよるてふその名はかりハ 又定家の哥に・此ころのみなミのかせにうきみるのよるくす、し芦のやの里 (第八十七段)

哥に・わたつミのかさしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路嶋山 是ハ浪をかさしといへり (第八十七段)

・つもりそふ老となるともいかてかハ雲のうへなる月を見さらん (八十七段)

△堀江漕たな、し小舟行かへりおなし人にや恋わたらん (第九十二段)

△世の中に高き賤きなそへなくなと有初し思成らん (九十三段)

・山ひめのこきも薄きもなそへなくひとつにそめぬ山のもみちは (第九十三段)

○秋の夜ハはる日忘る、物なれや霞に霧やちへまさらん (第九十三段)

○ち、の秋ひとつの春にむかハめやもみちも花もともにこそちれ (第九十三段)

○秋かけていひしなからもあらなくに木の葉ふりしく江にこそ有けれ (第九十五段)

古今第七賀○桜はなちりかひくもれおひらくのこんといふなるみちまかふかに (九十六段)

古今第十七○我たのむ君か為にとおる花ハ時しもわかぬものにそありける (九十七段)

古今第十一恋○みすもあらず見もせぬ人の恋しくハあやなくけふやなかめくらさん△捨遣に身にかへてあやなく花をおらむかないけらハ後の春もあハまし 古今第十一恋しるしらぬなにかあやなく分ていはん思ひのミこそしるへ成けれ (九十八段) へ註8

△哥に・忘る、もしのふもおなし古郷の軒端の草の名こ

そつられ 此哥一草二名と聞えたり (九十九段)

・もみち葉のなかれてとまるみなとにハくれなるふかき浪やたつ覧 次に此哥素性か哥とならへて載たり 愚見抄にいつれかまことならんと有 されとこれハ作物語なれハ詞の余情あるやうに書り 定家・みよしの、瀧津河内の春風に神代もきかぬ花そみなきる (百五段)

金葉連哥に・雨ふりハきしもしと、に成にけり かさ、きならてか、らましやハ (第百六段)

(雨ふりのりに朱線を引いて註あり○リイ本書不分明 (朱書))。

△此哥古今第十六哀傷也 作者紀ノ義行と有 勘ニ云友

次に、際だった独自の詞句とは言えないまでも、少々興味を惹かれる条々を列举してみよう。

○足すりをして「足」から朱線ヲ引イテ 文選ニ蹉跎とてふしまろふと有 (第六段)

△修行者たれともなし 遍昭など云 古注也 (第九段)
行かへり雲にのミしてふる事ハとあるをかへたり かくハあれとも有常か娘の事貞女の名をあらハしたり しかれハいつれの女も名をあらハさぬたくひにして此物語にてハ見るへきをや (廿段)

則也 爰にてハ業平の友と見る也 人ハ猶あたに成たり花をさきに恋んとも人をさきにとも見さりしか思ひの外なる事よと也 (百八段)

後撰ニ・雨ふれとふらねとぬる、我袖のか、る思ひにかハかぬやなそ 又・にくからぬ人のきせたるぬれ衣ハ思ひにあへす今かわきなん (百二十段)

△引哥・あれわたる秋の庭こそ哀なれまして消なん露のゆふ暮 (第百廿二段)

△思ふ事なととふ人のなかる覧あふけハ空に月そさやけき 是も此哥よりよみ出したり (第百廿三段)

小野小町と云説不可用 (三十七段)

△なをそありける 直の字定家天福の本にハ猶の字是可然 至ルハ順カオホチ勿論也 順ハ延喜の時分より有て天曆のみかとのころまで有し也 朱雀院の御宇承平七天慶九是を隔後の順が事か不審 (三十九段) 〈註9〉
△糸などにて巻たるを云 天福の本にハかさなり粽とあり あやめにて粽をする事なけれ共けふハあやめを賞す

る日なれはかくいふ 捨遺第十八五月五日にちいさきかさり粽を山菅の籠に入てと有(五十一段)

△後撰にハ爪木こるへきと有 両説俊成用らるゝと見えたり 俊成の哥に・住わひて身をかくすへき山里にあまりくまなき夜半の月かな 同・今ハとて爪木こるへき宿の松千代をハ君と猶いのる哉(五十九段)

△業平宇佐の使に下る也 惣して御代に一度使たつ時は定つて和氣の清丸か子孫ならてハ下さるゝ事なし 不審也(中略) 朝家に重事ある時ハ宇佐へ使を立て問ハるゝ也

△我を侍らん宇治の橘姫と云下の句をかへたり 此段狂言也(六十三段)

△清和御門の御寵愛有て召仕へる女二条后也禁色をゆるさるゝ也 禁色の宣旨と云事有 女も色ゆるされたるハ綾織物をきる也 禁秘抄に聴^{ユルス}色^ヲハ大臣の女或大臣の孫也(六十五段)

△古今ニ典侍直子と作者をかけり ^{スケノナライコ} 此集におゐて子細ある事也 是ハ作物語に書也

△此哥古今第十三讀人不知と有 され共人丸の哥也 業平只今の心に同^キ程^ニ爰にてうたひけるにや 詠吟也(第

六十五段)

業平染殿家礼ゆへ詞をくハへらるゝ也(六十九段)(礼から朱線を引き、「此字本不分明」と朱の註)

△狩の使ハ春二三月也 古注にハ五月四日と書也(六十九段)

△——高階氏ハ齋宮腹とて今に此氏ハ参宮叶ハすと云^{タカシナ} 高階峯緒の子師尚実ハ業平の息也と云(六十九段)

△莊子か夢に蝶に成たり 不知又蝶か莊子に成かと云かことし 古今ニハ世人さためよと有(六十九段)

△源氏にも・千尋ともいかてか知らん定めなくみちひるしほの長閑けからぬをと有(七十五段)

△天照太神と春日明神との契給し相殿^{サクト}の昔を思ひ出す覽と也 下こゝろハもしあひし事や思召出すやと也 長有て優なる哥也 風の哥の是本也(第七十六段)

△清輔朝臣の哥道さしも達者なれ共宇治にて河水久澄といふ題をとりて会の最中によミをくれて赤面ありて後・年経たる宇治の橋守ことゝハん幾世になりぬ水のみなかミ・五文字をすへかねたると申されき(八十二段)

・王荊公か・賞^シ花釣^リ魚宴食釣^ツこれも案しほれて釣針を口に入てそれを人に見せしとて吞たるといふ 沈思する

道理也（八十二段）〈註10〉

△此歌後撰にハ上野の峯雄と有 作物語の義也（八十二段）

目蓮母の為に孟蘭盆行れしも同シ心也（八十四段）

○ゐ中人の哥にてハあまれりやたらすや△是伊勢か詞也
有餘不足のある物也 此哥ハいかゝと双紙地にてほうひ
したる也（第八十七段）

△愚見抄にハ海士のさかてとハ呪咀する事を云・地神四
代彦火、出見の尊兄の火能芥ホノスソリの命さちかへをし給ひ鉤を
失ひしほつゝをの翁と云神のハかりことにて龍宮へ入尋
出しのろい申を云 うしろ手にてなげ返し給ふ 此儀日
本記第二巻に見えたり 御説右の通・相伝の説蟹のかつ
きをする時海底へさかさまに成て入とて手にて浪をうち
て入也 息もつきあへすくるしき也 思ひの切なる所也
のろいこと女のおちてかへらんかと也（第九十五段）

△愚見に仁明の御子文徳光孝両天皇などを申 いつれに
ても可（百二段）

△業平自記と見えたり 実ハあれ共幽玄にもなきをいふ
なる（百二段）

△愚見抄に人魂の飛を見て・たまハみつぬしハ誰ともし

らねともむすひそとむるしたかへのつま 此哥を三返誦
して衣の下かへのつまを結ふ事とむかしより云伝へたり
又御説ニ・あかさりし袖の中にや入にけん我玉しゐのな
きこゝちする（第百九段）

△万葉にも鼻ひゝもとけとよめり（第百十段）

△此両首後撰とハ少かハる 作者筆法也 心をおきかへ
たる面白し（第百十段）

△光孝天皇の行幸也 芹河の行幸嵯峨天皇初て有し例也
仁明文徳清和陽成此四代ハ民のいたハりを思召て野行幸
ハ停止也 光孝の御代に御再興也 さるにより此時の哥
に・さかの山みゆき絶にし芹河の千世のふる道跡は有け
り と後撰第十五ニ有 此哥も同時也 行平の哥也・此
段此物語にハ不審也 業平卒して七ヶ年後也 されとも
作物語なれハ也 伊勢七条の后宫へ業平一期の事を語奉
るをしるせる物語なれハ在原氏の事なれハ余情あるによ
り書加へたる也（百十三段）

△詞書ニ同日鷹詞にて狩衣の袂に鶴のかたを縫て書付け
ると有 爰にてハ老のされハうたると云心有へし 行平
今日の出立をわかくするをいへり さひハ閑カンの字とも宿サヒ
鵠毛ツキケと云り（百十三段）

△行平ハ六十に餘り七十におよぶ 御門五十七歳也(百十三段)

△此哥古今にハ物の名の部に墨消スミゲシの哥ニ小野小町哥也 作物語ノさま也(第百十四段)

△久敷といはん上の句ハ序哥也 されとも浪路を隔る程にその縁もあり 濱ひさし 愚見知顯抄などにさま／＼にあれ共不用 唯濱に有ル家也 板ひさし筈ひさしなど云ことし 定家熊野行幸の御供にまいりて新宮三首の中庭上の冬菊と云題にてよめる哥是を本哥にて・霜おかぬ南の海の濱ひさし久敷残る秋のしら菊 此哥濱の家の心ならねハ題の庭の文字落題也 帰説に高き砂のひさしのことくなるを云(第百十五段)

、馬上^ニ相逢^テ無^ニ紙筆^一 頼^レ君^ニ伝語^{シテ}報^ニ平安^一の心也(第百十五段)

△文徳天安元年行幸と云へ共国史にも実録にも見えず 新古今ニ此こと葉のことくに住吉に行幸有し時と載たれとも何のみかとの御幸とも見えず 国史にもしるしおと

次に、引用にかかわるものを挙げてみよう。

愚見抄にハ 肖聞にハ 御説にハ(十五段)

すにや(百十六段)

△後撰にハ老懸ライカケを云と見えたり 是ハ草のかつらを女にたとへていふ 玉ハほめたること葉也(第百十七段)

○形見こそ今ハあだなれ是なくハ忘るゝ時もあらまし物を「あた」のたから朱線を引き「古今ニも両説」(墨書)。

(第百十八段)

○近江なるつくまの祭とくせなんつれなき人の鍋の数みん「冒頭右脇から細字にて「捨遺第九ニいつしかもと有」。

(第百十九段)

△催馬楽に青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふ笠ハ梅のはなかき 是をとりてよめり(百二十段)

△此哥の故事両義有 井手の左大臣の事又一義ハ大和物語の事(第百廿一段)

△應^{スヘカラク}有^ル春^ノ魂^ニ化^{シテ}為^レ燕^{メド}年々飛^テ入^ニ未央^{ヒワウニ}樓^ニ上^ス

「樓」に朱線を引き、「此字本書不分明」と墨書(第百廿二段)

大鏡にハ 論語ニ 御説ニハ 日本記にハ(十六段)

御説 愚見 (第十八段)

会第三二 (第廿四段)

御説にハ (第廿六段)

御説 (第廿九段)

法華經普門品ニ (第三十一段)

△逐儒書史漢ニモ (第四十段)

毛詩に (第四十一段)

經文ニ (第五十段)

又龍猛大士曰 (五十八段)

此義最勝王經にも有 (五十九段)

漢書ニ (六十段)

後宮職員令曰ク (六十五段)

肖聞に (第七十六段)

△目将^{メハタ}かひをつくりなから也 明石の入道のかひを作と

源氏にある類也 (七十七段) (ハタに「まさに也」と朱の

註)

△たばかり 日本記に思慮と書たり 万葉に方便の二字

をよます (七十八段)

△孫^{ソシヤク}綽か天台山の砥にかやうなる見所を筆と、こほらす

文體^{テイ}に顯したるに似たり (第八十七段)

白樂天送門の詩ニ (八十八段)

△催馬樂に青柳のしなひをみれハと有 揚^{ヤナキ}の糸をも云へ

し 愚見に (第百二段)

△古今第四こと葉書に (百六段)

註1 へ伊勢にいて——とへ千はやふる」の類話を挙げてみる。業平の二男滋春に仮託した秘伝書で、南北朝から室町のごく

初期にかけての成立とされる神宮文庫蔵本『伊勢物語髓腦』(片桐洋一氏『伊勢物語の研究』資料篇)に、

——長能が私の記によみていはく、

いせにしていせをばいかゞのぞくべき するてのいせもいせのいせにて

とあり、『伊勢物語難儀抄』の類書たる宮内庁書陵部蔵本『伊勢物語難義注』(『伊勢物語の研究』資料篇)に「一、伊勢物語といふ事」として、

むかし、此物がたりをとうぐうの御所にてつくられけるにゆるされ色きたる女房のをとなしきが、かけおびかけたるがいで来て、いみじふ此物がたりつくり給ふ物かな。是に歌二首いるべきよしわびければ、いづくより、誰人のかくの給ふぞとへば、返事はなくて此歌をいひけり。

神かぜやいせのはま萩をりふせて たびねやすらむあらきはまべに

おもふこといはでたゞにややみなまし われとひとしき人しなれば

かくいひてたちけるを、袖をひかへてとひけば、伊勢よりの御使なりといて、かきけつやうにうせにけり。さては大神宮よりの御使ぞとこころえて伊勢物がたりといふ也。

とあり、また、室町時代後期の成立とされる鉄心斎文庫蔵本『伊勢物語奥秘書』（『伊勢物語古注釈叢刊』二）に、

一義云 業平大裏の 綱と云所にて一世の間読給へる哥ともを草案にして此双紙を何と外題を可置やらんと案しける所へ 或日のつれ／＼にかふろなる童か短冊を持て来るか 双紙をあそはしたる由を承り及ひそろ 此哥を御入そろて給りそろへと云 業平ははいつくよりと問給へは 伊勢の方よりといふてやかて帰りぬ 人を付て見せ給けれハ やかてかきけすやうに見へさりけり 其哥に云

神風や伊勢のはま萩吹ききて 旅ねやすらんあらき濱へに

依之 伊勢物語と名付るとなり 又一義云 男女の間をいせと云なり 中畧して伊勢物語と云り

と見えている。「ゆるされ色着たる女房」は、万法寺本など仮名本『曾我物語』巻五「三原野の御狩の事」で展開される「伊勢物語の秘事」にも見えて、「ふるされ色」「ふるされ色」とするテキスト（古活字本）などもある。業平が木幡山の野干（実ハ玉津島明神の御使い）と契つたという奇怪なる所説も、おそらくは『伊勢物語難儀抄』『玉津島の明神の御使ひといふ事』のごときものを本説とするのであろう。玉津島明神の使霊が狐であることは、『古今集無名作者抄』の一本などにも見えている。

註2 「伊勢や日向の物語」に関しては、宮内庁書陵部蔵本『冷泉家流伊勢物語抄』（『伊勢物語の研究』資料篇）には、「名に付て四の義あり」として、

三、伊勢や日向の物語になずらへて、いせ物語と云也。彼伊勢や日向の事、日本記に云、昔、日向の国佐伯恒元ツネモトといふ人有。伊勢の国に文屋フシヤの善算といふ者有。――

と見え、また手許にある『伊勢物語当流抄』（大津有一氏は『伊勢物語古註釈の研究』の中で、旧註の第三十番目に採りあげておられる）をよむと、巻末部に、

此さうしを伊勢物語と号する事、――また一説に此草子をいせや日向の物語といふ、いかんとなれば、ひとりの事を次第不同にかきたり、伊勢や日向といふもまたまらぬ事なり、日向之國は死たるものを不埋、やくなり、よしかすといふもの、とんしして、しにもやらぬに、国のならひとて、時もうつさすやきたりけれハ、ゑんま王御覽して、娑婆へ可帰と仰せけれハ、はやからたハ、やきうしなひてなし、いかにせんともだへこかるゝ處に、閻魔きこしめし、伊勢の国には、しんめい、やく日をいミ給ふにより、其儘人を捨るなり、文屋のひてもと、いふもの死たるを、其儘すてたり、其からたへよしかすか、魂を入れる、ひてもとよみかへり わか在所へゆくに、かたちこゝろハ皆わかおやにて、さてゆふ事をきけは、みな日向の物語なり、かたちと心と別なり、それよりしてことのそろわぬ事を、いせや日向のものかたりとなつてたり、此さうしも如此親子のあひたなりとも、ゆめく他見有へからず、可秘と見えてゐる。

註3 書陵部蔵本『伊勢物語知頭集』では、「男」をなりひら、「女」を「雅樂のかみ近江の権の大承紀有常がむすめども」とし、「いちはやき」は、「一早」と書いて「切せちなり」の義、「みやび」は「閑」の字で「ふるまひ」の義と説く。また書陵部蔵本『冷泉家流伊勢物語抄』は、業平十六歳、「女」は「少納言刊部大輔紀有常が娘」の姉妹、「みやび」には二義あつて、一は「閑麗ミヤビケリ」で「たはやかにしてやさしき心」、一は「嫁マアハ」の義とする。また鉄心斎文庫蔵本『十卷本伊勢物語註』（『伊勢物語古註釈叢刊』一）でも姉妹を「少納言形部大輔紀有常の娘」とし、「イチハヤシトハ早速ト書リ」、「ミヤヒ」は「タハヤカニヤサシキ義」また「嫁ヲ云」と註を施し、同所蔵本『伊勢物語奥秘書』（同二）では姉を「むらさきのうへ」、妹を「忍ふの内侍」とし、「いちはやきを」早速イチハヤウとしてかの張良の故事を引き、「みやび」は「嫁事一説情ミヤヒ」とする。また、同所蔵

『増纂伊勢物語抄』(同一)では、「いちはやし」を「早速」、「みやび」は「閑麗」で「ミヤビカナリ」と「嫁」との両義を註に施している。斯く見てくるならば、冷泉家流の所説——『遊仙唄』と『史記』とを引用して「閑麗」・「嫁」と説く一つの系譜が明確に辿れよう。業平と「閑麗」との関わりは御伽草子「花鳥風月」にまで受け継がれ、葉室家の扇合わせの席上光源氏と業平の一代記が披露されるが、業平は「かんれい王」と語られている。前段階における誤読を踏襲したものと考えられる。なお、一条兼良の『伊勢物語愚見抄』(『伊勢物語の研究』資料篇)では、「いちはやき」は「逸早」で「すぐれてすみやかなる心」、「みやび」は「日本紀」を引いて「風姿」と書いて「みやびかにたはやぎたるすがた」と説きながらも「このみやびとはいさ、か心かはるべし」として「色ごのみ」説を提示する。

註4 本書では「つゝ、ゐつの」とあるが、書陵部蔵本『伊勢物語知願集』では「つゝ、ゐづゝ」となっている。同所蔵本『冷泉家流伊勢物語抄』では「調五」で、男女ともに五歳の義にとり、「まろがたけ」は、阿呆親王の王子なので「丸」、またの説として、「凡、人皆丸を惣名とす、一義には、阿子丸を指す」と叙べ、人の娘の「惣名」とも説く。ここで、阿古の文字に注目したい。『十卷本伊勢物語註』では、「女」を「有常の娘阿子」と点出する。『増纂伊勢物語抄』も同様。いま二例加えるならば、本学図書館蔵本『伊勢物語』の一本(永正十四年、三条西實枝筆)では、この第二十三段を「紀有常娘段」と名づけ、
 兩人五歳ノ時ノ名ヲバ 業平ハ 曼陀羅 有常娘ヲバ阿古ト云シ也

と註を施している。また、書陵部蔵本『伊勢物語難義注』及び天理図書館蔵本『伊勢物語難儀抄』も、「ありつねかむすめ」あこを、大内女房たちの一人として点出する。書陵部蔵本冷泉持為卿述『古今和歌集』(宝徳二年の講説、いわゆる世に請う持為註の一本、松江市の熊野神社蔵本『古今和歌集』もこれで、漢詩などの引用部分はこちらの方が訓み易い)により卷二・春上の「題不知、読人不知」

七〇 待てといふに散らでしとまるものならば なにを桜に思ひまさまし

の註に、二条家の説では業平が惟喬親王に奉ったものとするが、「師説」によれば高安の郡司惟宗惟道の娘に通いつめるのを、有常の娘花子が恨んで、親の許に居て詠んだ歌としている。「高安の女」を惟宗惟道とするのも問題であるが、ここにハナゴ

が出てくることに注目せざるを得ない。

「筒井筒」の女を有常の娘とするのは冷泉家の所説のごとくに考えられようが、「誰ともなし」とするのは別として、『伊勢物語難儀抄』、『伊勢物語難義注』では、ともに「やすもちのしんわう」の娘とする。同様、「高安の女」も、佐伯忠雄の娘とするのが冷泉家流の行き方の方であるが、『伊勢物語難儀抄』、『伊勢物語難義注』ともに「住吉の神主の娘」とする。「親のあはすれども」の註でも固有名の扱いに揺れが認められ、「親」（阿呆親王・紀有常）が撰ぶそれぞれの子供の配偶者の名をも異にする。

註5 芦荊説話は、従来『大和物語』百四十八段、『拾遺和歌集』卷九、『今昔物語集』卷三十・第五、九卷本『宝物集』卷三、『源平盛衰記』卷三十六、謡曲「芦荊」また御伽草子「あしやのさうし」（天理図書館蔵本、『室町時代物語大成』一）などを採りあげて考察されてきたが、この期に及んでは、「伊勢註」をも視野に入れる必要があろう。

註6 「けこ」から朱線を引き「家子」と註。

註7 「いさこの山」の傍註、「誘フ義也」。

註8 「あやなく」のあから朱線を引き、「アイナキ心也」と傍註。

註9 「順力オホチ——」に、「文言不分明也 本書如此」と朱書。（止）

（國學院大學文学部教授 徳江元正）